

なぜ「制服の女」は、理不尽な 権威を漂わさせるのですか？

「ビジネススーツにおいては、権威や規律遵守性が高ければ高いほどセクシーに映る」という調査結果がアメリカで出たことがある。これは「ポテンシー（権威／他人に対する影響力／性的能力）効果」と呼ばれている。

似たような効果が、一部の女性の制服に働く場合がある。しかもその場合、効果は単なる「セクシー」などという生ぬるいものにはとどまらず、男女双方から熱狂的な崇拜や憧憬や羨望の眼差しを惹きつけ、制服に特権的ステータスを与えてしまうまでに働いてしまう場合がある。

スチュワートの制服を着用してのマナー講座には申し込みが殺到し、「一度この制服を着てみたかった」と感涙にむせぶ女性までいるという。

この場合、憧れの対象になる制服は、冷静に美的見地から見ると、流行の対極にあつて着心地の悪そうなものであることが多い。働く上で機能的なデザインかといえば、そうでもない。しかも「着崩し」や「個性的な着こなし」が難しい、正装性の高い服であるという点で、個性重視のこの時代に逆行している。

なく、「制服を着た女」が漂わすポテンシー（彼女たちの性的魅力には、この能動的な性的能力を匂わせる言葉もよく似合う）のオーラというのが正確なところだろうと思う。

では、それはいったい、いかにして発せられるのだろうか？

……と、「制服を着た女」のことをあれこれ考えてネット上をさまよっていたら、そのものずばりの「制服を着た女（Women in Uniform）」というタイトルの歌にぶつかった（歌うのはオーストラリアの超無名ロックグループ、スカイフックス）。男のベタな妄想まる出しのその歌詞の中に、次のようなフレーズがある。

「制服を着た女は、つれない女に見えても、

制服を着た女は、実はすっぱえホットなんだ！」

(Women in uniform, sometimes they look so cold,
Women in uniform, but, Oh! They feel so warm.)

「制服を着た女」が、時に男のある種の幻想の琴線に響かせることがあるらしい。この「すっぱえホット」は、



た事実である。ただし、制服ならなんでもいいというわけではない。ちなみにこの歌の中に登場する「制服を着た女」とは、警官、スチューワーズ、看護婦、軍曹。一般人の視線にさらされる中で厳しいプロ意識が要求され、社会的にちよつとした権威が公認されている（スチューワーズの権威はその国の民度に反比例する、という説も聞くけれど）職業であり、彼女たちの制服姿は「職業婦人」という言葉を連想させる。

では、スカイフックスは「冷たい制服」の下の「官能的な熱さ」（「warm」にはそんな意味もある）に、いったいなぜこんなに興奮してしまうのか。制服には、人をすつきりと抽象的な記号にしてしまふ働きがある。だからこそ、私たちは初めて会う人であっても医者や看護婦の制服を着ている人の前では心安く服を脱いでしまえるわけだし、また、警備員の制服を着てさえいけば、泥棒であってもすつかり欺かれてしまうこともあるわけだ。

しかし、いったん制服の人々と接してみると、制服ほど個性を無防備に露呈してしまう服はない、ということを知った経験は誰にでもあるのではないだろうか。

制服で没個性を装うことができるという油断からか、自由な服装ではかえってうやむやにされていた個性が、おのずとにじみ出てしまうのである。しかも、規律性の高い服であればあるほど、隠された個性は、親密な密やかな感じをもつて見る人に伝わってしまう。

これ見よがしな個性は、暑苦しい。抑えても漏れ出てくるような個性、これこそが「オレだけが理解できる」という類の官能的な魅力に転化する。これを日本語圏の男は「スキ」と呼び、英語圏の男は「ヴァルネラビリティ（vulnerability）

弱さ」と呼んで、そこに視線の杭を打ち込むのである。視線が女に及ぼす美容上の効果についてはここで改めて述べるまでもあるまい。その結果、美容上で優位に立ってしまう「制服を着た女」は、それだけの理由で暗黙のうちに理不尽な権威を帯びていく。

しかも、制服が一般の流行からほど遠くて非機能的で窮屈であるということ、これが実は、彼女たちの権威を高めるのにますます役立っているのである。

歴史上、特権的な地位を誇り、羨望と憧憬の眼差しを一身に浴びてきたファッションリーダーの着た服のことを考えてみれば、このからくりがよく分かる。

彼女らは、着こなすに努力と試練を要する、着心地のよくない服をあえて堂々と着こなしたからこそ、大衆の憧憬的になりえたのだった。

おしやれで動きやすい服ならば誰にでも似合う。しかし、着こなすに忍耐や試練や力量が試される服は、選ばれた女でなければ着ることができない。（彼女たちは「制服を着る資格」という言葉をよく口にするではないか）

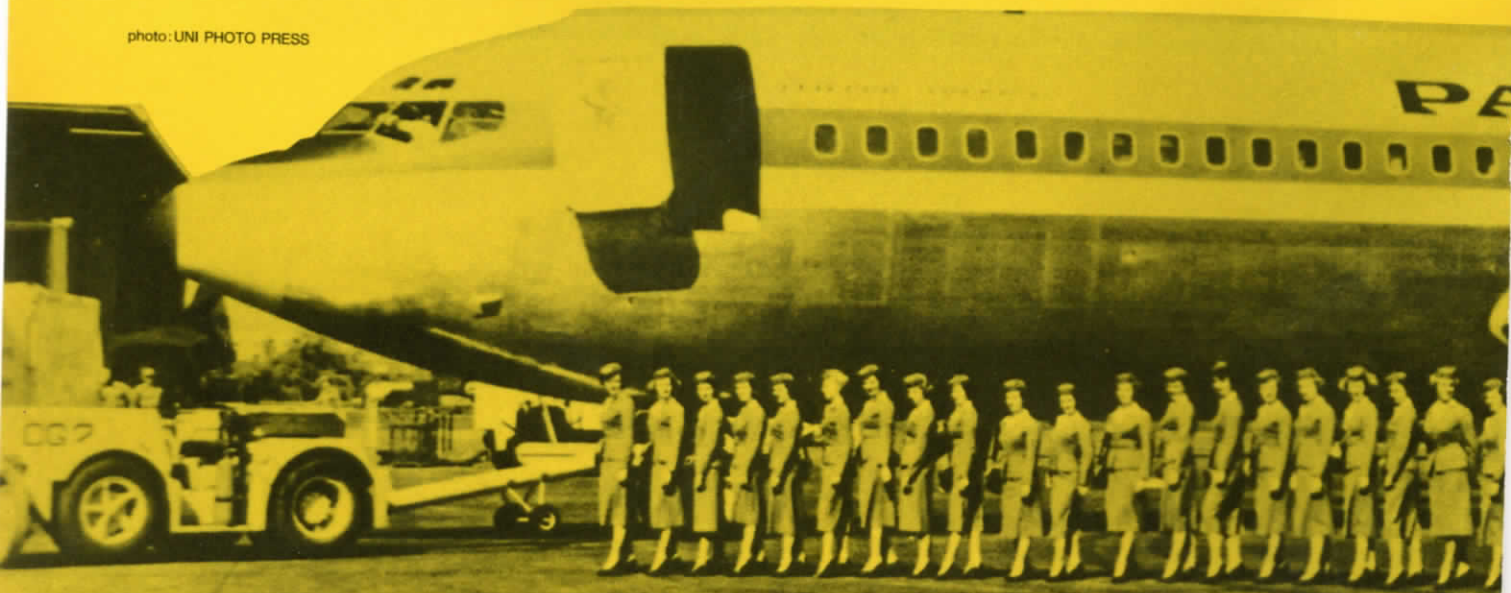
制服は、非機能的であればあるほど、また、流行から背を向けていければいるほど、誇り高き女にとっては快い服となる。

この快さが生む自信がオーラの正体である。この時、彼女たちの脳内に麻薬的な快感物質が分泌されていて不思議ではない。「ポテンシー」にはクスリの効力、という意味もある。

● 中野香織

● 中野香織（なかの かおり）1969年生まれ、東京大学教養学部非常勤講師、ファッション、映画を中心とするイギリス事情が専門。訳書に「二・ホランダー」性とスーツ——現代を脱が形づくられるまで（白水社）等。

photo: UNI PHOTO PRESS



in mode?
out of mode? #1